

「～てみる」「～ておく」「～てくる」の表現意図 —話し手の意志表現を中心に—

市川 保子

要 旨

補助動詞は日本語学習者がなかなか使えない言語形式である。その理由は、使いたくても、使い方がわからなかったり、使ったときと使わないときの意味的な差がつかめなかったりするからである。また、使わなくても意味が通じるため使わなくて済みます場合も多い。補助動詞はアスペクトなどの文法的意味だけでなく、話し手の心的態度を表す場合が多い。本稿は補助動詞「～てみる」「～ておく」「～てくる」の実際の使われ方を観察し、それぞれの持つ表現意図を探ることを目的とする。観察は、表現意図と文型式がどう結び付いているかを、話し手の意志を表す表現を中心に行う。観察を通して、これらの補助動詞が間接表現・婉曲表現としての機能を持ち、待遇表現に結び付いていることも探ってみたい。

〔キーワード〕 補助動詞、表現意図、すがたともくろみ、間接表現

1. はじめに

「～いる」「～である」「～ておく」「～てしまう」などはアスペクトを表す補助動詞としていろいろな研究がなされてきた。そこでは前接する動詞の意味分類や、「動詞＋補助動詞」の表す意味分析が主であった。他方、日本語教育では話しことばの重要性が叫ばれるとともに表現意図・伝達機能の研究がなされ始めてきた。水谷信子氏の研究¹⁾は補助動詞を話し手の立場・心的態度から統一的にとらえ直そうとするものである。そこでは実際の会話を観察することにより、「動詞＋補助動詞」が話し手の立場からどのような使われ方をしているかを分析、一般化させ、教育に役立てることを目的としている。

従来の研究が補助動詞の文法的意味の研究であるのに対し、水谷氏のそれは補助動詞の使い方の研究であると言えよう。

「動詞＋補助動詞」に限らず、一つの言語形式において、それが成り立つ文法的条件、文法的制約、そしてそれが持つ文法的意味と、それ自らの実際的な使われ方は連続するものである。従来は文法研究に重きが置かれてきたようであるが、どちらに重点を置くにしても、意味と使い方の両者を視野におさめた研究でなければ片手落ちと言えよう。

日本語教育事典では補助動詞を次のように定義している。

ある動詞が他の動詞の後に付けて用いられ、これにある一定の文法的な意味を付け加える働きをする場合、それを補助動詞という。

また補助動詞には、

1) 前の動詞を「～て」の形にするもの(例「食べている」)

2) 前の動詞を連用形にするもの(例「食べ始める」)

の2通りがあり、1)の場合のみを補助動詞ということがある。補助動詞となりうるものには、「いる、ある、おく、しまう、いく、くる、みる、みせる、あげる、くれる、もらう」などがある。

本稿は補助動詞の中から「～てみる」「～ておく」及び「～てくる」を取り上げ、実際の話しことばの中での使われ方を観察し、文法的意味との関わり合いを考えることを目的とする。観察の対象は上の3つに絞るが、比較する上で、必要に応じて「～ている」「～である」「～てしまう」「～ていく」にも触れる。その他の「～てくれる」「～てもらう」などの授受表現は対象としない。

話しことばの中で補助動詞がどのように使われているかは、話し手の心的態度、そしてそれをどう表現するかという表現意図と深く関わっている。表現意図の観察はいくつかの段階に分けることができるが、本稿では、観察の対象を、話し手の意志表現に絞り、そこに現れる文型式と表現意図の関わりを中心に調べる。従って、話し手の意志・願望、聞き手に対する要求・命令などの発話が観察の中心となる。また、「動詞+補助動詞」のいくつかを通して、文型式・文構造と表現意図をどう結び付ければいいのかを模索してみたいと思う。

本稿は文の構造、文法から表現意図を見るという方向をとっており、文法に関しては高橋太郎氏の考え方²⁾を、表現意図に関しては宮地裕氏の方法論³⁾をとる。そして本稿の研究の方向として水谷信子氏の考え方を指すものである。

2. 表現意図について

2.1 表現意図

宮地裕氏は「話しことばの文型(1)」で表現意図を次のように定義している。

ここに言う表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。

本稿では宮地氏の定義に従って表現意図という言葉を使う。ただし、1で述べたように本稿の扱う範囲は、言語主体(話し手)による意志表現、要求表現が中心になる。

また、宮地氏は表現意図を分類し⁴⁾、分類に当たって次のように述べている。

表現意図の文形式への実現は、結果としても、述語においてであって、主語を含むところ

の修飾語が、関与するところは、少ない。

宮地氏が述べるように、表現意図の文形式への実現の観察は述語の観察であると言えよう。

「ちょっと隣の人に相談してみようと思っているんですけど。」これは日本語教科書⁶⁾の会話文に出てくる1文であるが、この文の「～てみる」を観察するためには、

- 1) 「～てみる」に前接する述語（相談する）の観察
- 2) 「～てみる」に後接する述語（～てみようと思っているんですけど）の観察

という二つの観察が必要である。次の例でも同じことが言える。

その時にまた来てみます。

僕が見てみましょうか。

奈良とか神戸とかに行ってみたいと思うんですけど。

3年間の休職を頼んでみることにしたの。

あとであなたからもよく聞いてみてくださいよ。

それを今回の調査と比べてみるわけですね。

今年度の調査計画をあたってみただけど・・・。

1) —部分では、「来る」「見る」「行く」「頼む」等の動詞がどのような意味的共通性をもつかを観察し、「～てみる」の前では意志を表す動詞が来ると分析できる。一方、2) ～～部分では、話し手の意志（～てみます／～てみましょうか）、願望（～てみたいと思うんですけど）、依頼（～てみてください）等の表現に「～てみる」が使われていることを観察する。

1) は主として従来の文法研究でなされてきた部分であり、表現意図の研究としては2)、及び1)と2)の結合したものに焦点が置かれるであろう。（もちろん話し手の表現意図を探るためには、1文の観察のみでは不十分で状況・文脈の中での観察が必要であるが、本稿ではその前段階の、宮地氏の言う「表現意図の文形式への実現」として2)を中心に取り上げることになる。）

2. 2 補助動詞の表現意図

宮地氏は「～てしまう」「～てある」「～ている」「～ていく」「～てくる」等を態の表現（用言によって表される概念の分化を示す表現）に分類し、

これらも、（話しことばの）文型の一部に参与するものであるが、当面、（表現）意図の分担範囲でなくて、用言その他の語、およびその結合態のもつ“意義”に関するものと解釈し・・・（略）（（ ）筆者）

と位置づけている。補助動詞が直接的には表現意図に関わらず、単に意味を添えるだけのものであるか否かは本稿での観察の間中揺れ動くものであった。しかし本稿の立場としては、補助動詞が単に意味を添えるだけのものであったとしても、意味を添えることによってなんらかの表現意図に関わっているという立場をとる。意味と表現意図は連続するものであるという考えに立つからである。

3. 補助動詞の文法的意味

ここでは補助動詞を文法的な面から概観する。始めに文法的意味を、続いて文法的制約について考えてみる。

3.1 すがたともくろみ

高橋太郎氏は「すがたともくろみ」の中で、「動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味を「すがた(aspect)」、「動詞のあらわす動作がなんのためにおこなわれるかをあらわす文法的な意味を「もくろみ」とし、「動詞+補助動詞」をすがた動詞、もくろみ動詞に分けている。高橋氏によれば、「～ている」「～である」は専ら「すがた(aspect)」を表し、他方、「～みる」は専ら「もくろみ」を表す。「～てしまう」は本来「すがた」を表すが「もくろみ」も合わせ持ち、「～ておく」は「もくろみ」的要素が強いが「すがた」的な面も持ち合わせる。「～てくる」「～ていく」は本来は「すがた」を表すが、それぞれ近づく動き、遠のく動きを表すとしている。

氏の分類を筆者なりに解釈し、表にまとめると次のようになる。

	すがた(aspect)	もくろみ
a ~ている	_____	
b ~である	_____	
c ~てしまう	_____	
d ~てくる	_____	_____ (近づく動き)
e ~ていく	_____	_____ (遠のく動き)
f ~ておく	_____	_____
g ~てみる		_____

補助動詞は高橋氏の言う「すがた(アスペクト)」「もくろみ」のいずれか、または、両者と密接に絡んでいる。例えば「～ておく」は「すがた」「もくろみ」の両方の用法を持ち、次のように分類される。(例文は高橋氏のものより選ぶ。)

1) 「すがた」動詞としての「～ておく」(下線筆者)

1. 対象を変化させて、その結果の状態を持続させることを表す。

- ・そろそろあちらへお床をおいておきましてもよろしゅうございますか。
- ・八時までに戸をあけておけ。

2. 対象に働きかけないで、そのままの状態を継続させることを表す。
- ・この先のこともあるからうっちゃっとけ。
 - ・それから部屋はこのままにしといてください。
- 2) 「もくろみ」動詞としての「～ておく」
1. 次の起こる事柄のために準備的な動作として行う動作を表す。準備が基礎としてある。
- ・あなたに注意しておくけれど
 - ・これ、おわたししとくわ、車代よ。
 - ・なくなったらかっておけ。
2. 体験する動きを表す。
- ・おれも一度その人にあっておこう。
 - ・なんでもみとかにゃ。
3. ことさらする動作、しかたなくする動作を表す。
- ・せいぜいなごりをおしんでおきましたよ。
 - ・この試合は、わざとまけておいた。
4. 「しておいて」「しておきながら」の形で、「したにもかかわらず」の意味を表す。
- ・じぶんでころんでおいて、ひとにあたる。

「～ておく」の表現意図を考える場合、「すがた」「もくろみ」の両方に渡って観察することになるが、どこまでが文法的意味でどこからが表現意図を表す要素になっているのかわからなくなる場合がしばしばある。例えば、

- (1) a. 八時までに戸をあけておけ。
b. 八時までに戸をあけろ。

では a, b は意味的には殆ど同じであるので、「あけろ」と「あけておけ」を使い分けた話し手の表現意図に焦点を絞りやすいが、(2) ではどうであろうか。

- (2) a. この先のこともあるからうっちゃっとけ。
b. この先のこともあるからうっちゃれ。

(2) では「うっちゃる」の意味が正反対 (a では「放っておけ」の意味、b では「打ちきれ」の意味) に変わってしまっている。ここでは、「～ておく」が「すがた」として強く働いており、宮地氏が言うように補助動詞が単に意義に関するものだと考えざるを得なくなる。

しかし一方で、「～である」のように文法的意味としては「すがた」を表すものが、表現意図として「もくろみ」を表す「～ておく」「～てみる」に対応していく場合もある。

「もくろみ」を表す「～ておく」は代表的な用法として準備を表す。この準備を表すという点で「～ておく」は「～である」に対応する。

- (3) a. お風呂、わかしておいたよ。

b. お風呂、わかしてあるよ。

また「～ておく」が「もくろみ」の用法として「体験する動きを表す」とき、「～ておく」は「～てみる」に、また「～てある」に対応していく。

(4) a. 学生時代に富士山に登っておいた。

b. 学生時代に富士山に登ってみた。

c. 学生時代に富士山に登ってある。

このように、本来は「すがた」しか表さない「～てある」が「もくろみ」を表し、表現意図としては「～ておく」「～てある」「～てみる」の3者が同じ意図のもとで、状況に応じて使い分けられる可能性も出てくる。

2. 2 主語と補助動詞

本稿の目的は、話し手の意志表現の文型式を中心に、文型式と表現意図の関わりを探ることである。この節ではa～gの補助動詞が取りうる主語について見てみよう。まず、「私」が、続いて「彼」が意志表現をとりうるかどうか見てみよう。

(1) a. 私は今手紙を書いているの。

b. 私はもう手紙を書いてあるわ。

c. 私は今から1時間で手紙を書いてしまう。

d. 私はむこうの部屋で手紙を書いてくる。

e. 私はこれからもずっと彼女に手紙を書いていく。

f. 私はあとで彼女に手紙を書いておく。

g. 私は彼女に手紙を書いてみる。

これらの作例は、「すがた」を表す「～ている」「～てある」以外は、現時点での話し手の意志表現として使われている。主語が「私」の場合はc～gまでは適切な発話である。

(2) a. 彼は今手紙を書いているの。

b. 彼はもう手紙を書いてあるわ。

? c. 彼は今から1時間で手紙を書いてしまう。

? d. 彼はむこうの部屋で手紙を書いてくる。

? e. 彼はこれからもずっと彼女に手紙を書いていく。

× f. 彼はあとで彼女に手紙を書いておく。

× g. 彼は彼女に手紙を書いてみる。

(2) では主語が「彼」となっている。「すがた」を表す「～ている」「～である」は「彼」についての状態を表している。一方、c「～てしまう」 d「～てくる」 e「～ていく」は(1)と同じように「彼」の現時点での意志を表すことができるだろうか。筆者には発話としてやや落ち着きが悪く思われる。これらは文末に話し手の心的態度を表すムードの助動詞や引用文を使うと落ち着いた発話になる。

- c'. 彼は今から1時間で手紙を書いてしまうと云ってた。
- d'. 彼はむこうの部屋で手紙を書いてくるそうよ。
- e'. 彼はこれからずっと彼女に手紙を書いていくようね。

次の f「～ておく」 g「～てみる」ではどうであろうか。筆者にはさらに不自然な発話に感じられる。これも引用表現にしたりムードの助動詞を使って初めて落ち着く。

- f'. 彼があとで彼女に手紙を書いておくって。
- g'. 彼は彼女に手紙を書いてみるらしい。

これらのことから、「～てしまう」「～てくる」「～ていく」「～ておく」「～てみる」は、話し手の現時点での「意志表現」を表すことはできるが、第3者の、現時点(発話時点)での「意志表現」を表すことはできないとすることができる。

2. 3 否定と補助動詞

では、これらの補助動詞と否定の関係はどうであろうか。否定の関係は複雑なので本稿の対象にする3つの補助動詞に絞り、話し手の現時点での意志表現との関係で用法で考える。補助動詞の否定形は、補助動詞そのものを否定にする場合(d1, f1, g1)と前接する動詞を否定にする場合(d2, f2, g2)がある。前者の場合は、高橋氏の言う「すがた」の否定であったり、「もくろみ」の否定であったりするが、後者の場合は「もくろみ」の否定になる。

- (3) d1. じゃ、私は手紙を書いてこないわ。
- d2. じゃ、私は手紙を書かないでくるわ。

- f1. 私、彼に手紙を書いておかないわ。
- f2. 私、彼に手紙を書かないでおくわ。

- ? g1. 私、彼に手紙を書いてみないわ。

× 82. 私、彼に手紙を書かないでみるわ。

dの「～てくる」とfの「～ておく」はどちらの否定でも成り立つようである。一方gの「～てみる」は、どちらの否定でも落ち着きが悪いように感じられる。⁶⁾ 従ってここから言えることは「～てみる」は専ら肯定表現に使用される言語形式だということである。

4. 観察の実際

水谷氏は補助動詞が持つ心的態度を明かにすることの必要性を主張し、補助動詞の心的態度は一樣ではないが、主として話し手の「立場・興味・将来への期待・遺憾の情」などであると考察している。筆者は水谷氏の指摘は非常に鋭く的確をついたものであると思うと同時にやや漠然としていると考える。水谷氏の考察を基本に置きながら、文型式と表現意図との結び付きをもう少し細かく見ていきたいと思う。

4. 1 「～てみる」

「もくろみ」の代表的機能を持つ「～てみる」を考察する。水谷氏は「～てみる」の共通的な心的態度を「話し手の興味・関心」とし、次のように述べている。

「食べてみる」はその食べ物の味に対する興味や、それを食べる時の感覚を知りたいという動作主の興味を示す。・・・(中略)・・・「食べておく」が食べ終わったあとの状況に期待や関心があるのに対し、「食べてみる」は「食べる」ことからの発見に関心がある。⁷⁾

「～てみる」の会話資料を観察するといくつかの共通的なパターンがあるようである。

1) 聞き手の助言に対する話し手の行動宣言を表す。

- (1) ホワイト：じゃ、読んでみます。
- (2) 田中：じゃ、そのころ、もう一度来てみますから。
- (3) ホワイト：そうですか、じゃ、書いてみます。あ、う、まだ慶応大学にいらっしゃいますか。
- (4) 学生：そうですか。じゃ、その時にまた来てみます。今日はどうも、ありがとうございました。
- (5) 学生：じゃ、明日、都合がいいかどうか聞いてみますから。
- (6) 先輩：それじゃ、山下にでも頼んでみるかな。

「～てみる」が会話の冒頭に出ることは少ない。何か既に前提があってそれに対する話し手の意志表示に用いられる。1) の場合は、相手の助言、または相手からの情報に対する話し手の意志表現である。文頭の「じゃ」「もう一度」が「～てみる」と結び付いているのが特徴的である。

(5)の場合は「都合がいいかどうか」という選択の引用文があるが選択が関わる時は「～てみる」が使われるようである。またこれらの場合「～てみる」を省略すると発話がぞんざいに感じられる。

- (1)* じゃ、読みます。
- (2)* じゃ、そのころ、もう一度来ますから。
- (3)* そうですか、じゃ、書きます。あのう、まだ慶応大学にいらっやいますか。
- (5)* じゃ、明日、都合がいいかどうか聞きますから。

これらは「～てみる」が発話の上で、丁寧さを加える働きを持つことを示していると言える。

- (6)* それじゃ、山下にでも頼むかな。

(6)は「～てみる」がなくても丁寧さの点では変わらないようであるが、それはこの発話が半ば自分自身に向けられたものであるからであろう。(6)では「山下にでも」の「でも」と「～てみる」の関連に注目したい。取り立て助詞「でも」は、ある事物や事実を例示し、それによって動作や状態の程度を示す間接・婉曲表現である。間接・婉曲表現は丁寧表現に結び付いていくが、「でも」のような間接表現が「～てみる」と共起しやすいとすれば、「～てみる」が話し言葉において間接・婉曲表現の役割を担っていると想像できる。次はその一つの例証である。

2) 間接的な表現によって話し手の丁寧な気持ちを表す。

- (7) スミス：そうだいいんですけど。まあ、暇な時には奈良のほうにでも行って、歩いてみようと思っているんですけど。
- (8) スミス：あの、紅葉見物もいいんですけどね、もし京都まで行くんだったら、せっかくの機会なんで、奈良とか神戸とかに行ってみたいと思うんですけど。
- (9) スミス：ええ。ちょっと隣の人に相談してみようと思っているんですけど。

(7)では「奈良のほうにでも」と「ほう」「でも」二つの間接表現が出ている。文頭の「まあ」も直接表現を避ける間接表現である。(8)の並立助詞の「とか」は単に例を示しているだけでなく、「でも」と同様、他の動作や状態の程度を示す間接表現である。奈良・神戸を漠然と示すことで自分の意志・希望をあらわにしないでいると考えられる。(9)では「ちょっと」と「～てみる」が呼応している。

「～てみる」は「ためしにする動作」を表す。「ためしにする」という遠慮した表現が、丁寧さへと結び付いていくのではないだろうか。

3) 意志表示に現れる「～てみる」

「～てみる」は次の形で話し手の意志を表す表現に用いられていることが多い。

A 「～てみようと思う」「～てみたいと思う」

- (10) ホワイト：はい、それで、20年前に井上先生も同じような調査をなさっているの、その調査と今回の結果を比較してみようと思っているんです。
- (11) ホワイト：あのう、女性ことばの年代による差を見てみようと思っているんですけど。
- (12) ホワイト：ええ。どういうふうに違ってきたかということを見てみたいんです。

またB、Cの形で意志を表すこともある。

B 「～てみたいもんだ」

- (13) 和夫：へ、あー一生に一度でいいから、こんなクリスマス之夜にしゃれたレストランなどで、美しい女性とロマンチックな時を過ごしてみたいもんだですな。

C 「～てみるか」

- (14) 小倉：さ、そいじゃ、行ってみるか。
- (15) 小倉：おう。来月、失業保険もらったら、行ってみるか。

4) 助言、依頼・要求表現に現れる「～てみる」

「～てみる」の助言表現では「～たらどうか」の形が多く見られる。「～みる」を使うことで、「ためしにやったら」どうかと自分の助言を間接的に表現することができる。

A 「～てみたらどうですか」

- (16) 山下：まだ時間があるんでしたら、今度、山田先生がいらした時に相談してみたらどうですか。
- (17) 丸山：そうですね、先生に直接、手紙でお願いしてみたらどうですか。
- (18) 丸山：あ、もう駄ですね。もし、必要なら紹介状を書きますけど、まず、井上先生に手紙でお願いしてみたらどうですか。たぶん、会ってくださると思うけど。

Bは依頼・要求表現である。ここでも「～てみる」を使って要求をやわらげている。

B 「～てみてください／～てみてくれ／～てみろ」

- (19) 英子：なにのんきなことを言ってんですよ。ほらほら。いやあね。ねえ。あとであんたからもよく聞いてみてくださいいよ。
- (20) 繁：ああそうか。留守番を頼める人があれば安心だなあ。聞いてみてくれよ。ああいいよ。ママも忙しいんだな。
- (21) 小倉：押して押して押しまくるんだ。土下座すれば、いちころだ。いいか。あした行って

やってみる。

5) 前置きのな「～てみましたが」

「～てみる」が過去の形をとり、その後逆接を表す語を伴って、本題に入る前の、前置きのな役割を果たす場合がある。多くの場合その前置きは本題がうまくいかなかったことに対する言い訳・弁解を表している。

(22) 典子：フー、4社まわったの、きょうは。ハー、機構改革のあいさつして、新任部長の紹介と顔つなぎしながら、今年度の調査計画をあたってみただけど・・・。

(23) 公務員：あれから、いろいろほかの会社にもきいてみたんですけどもね、だいたいこの程度ですね、これでまちがいないと思います。

6) 条件節の中の「～てみる」

(24) 先生：そうですね。例えば、同年代の女性でも、仕事をしている人なんか調査してみると面白いんじゃないでしょうか。

(25) 医師：そうです。ま、開いてみればね、悪性の腫瘍か良性の腫瘍か、つまり単なる骨の病気なのか、ま、それとも・・・

(26) 明：だけどねえ、もっと現実的によく考えてごらんよ。しばらく会わないでみると、ママの（この頃の）憔悴はひどいよ。

以上、「～てみる」を述語の形でまとめてみたが、「～てみる」の表現意図としては次のようにまとめられよう。

1. 専ら話し手の肯定的な心的態度を表す。
2. 「じゃ」「もう一度」「ちょっと」「～かどうか」等と共に現れやすい。
3. 「でも」「とか」「ほう」等の間接表現と共に現れやすい。
4. 心的態度を間接に表すことで丁寧さを表す。
5. 話し手の意志、希望、聞き手に対する要求、助言、依頼などに用いられやすい。
6. 話し手の興味・関心を表す。

4. 2 「～ておく」

水谷氏は「～ておく」の基本的用法を「準備のため」とするよりは「将来に対する意図ないし関心」と考えるほうが説明もしやすく、指導も用意であると述べている。「将来に対する意図」とすることによって

若いうちにあそんでおこう。

若いうちに海外旅行しておこう

のような文も統一的に説明できるとしている。

「～てみる」と同様「～ておく」も会話の冒頭に出ることは少なく、何らかの前提や相手からの申し出に対して話し手の意志表示または実行宣言として現れる。

1) 行為実行宣言を表す。

- (1) 医師：じゃ、薬を出しておきますから。
- (2) 坂本：切符のほうも、ついでだから探させておきますよ。
- (3) 佐江：・・あとでちゃんと届けておく。

(1) は医者对患者に対する発話であるが、「出しておく」と言うことで、「今すぐではなく」ということが含意されている。(2) (3) についても同じことが言える。

また「～ておく」は「ちゃんと」と呼応し(3)のように「ちゃんとしておく」の表現をとることが多い。次の例もそうである。

- (4) 金巻：・・しかしね、君がいなくなつて、ちゃんと通知はしといたはずだよ。

次の(5) (6) は水谷氏のいう「将来に対する意図ないし関心」では説明できにくい例である。

- (5) 小倉君の免許証取り戻しにさ。おじさん、頼むよ。＜ヘイ＞あ、お勘定しとくわ。
- (6) 英子：・・ええ、あのお気持ちだけちょうだいしておきます。はい。

(5) は飲み屋を出るときの、飲み屋の亭主に対してのことばであり、(6) は電話での会話である。(5) (6) は(1) などのように「今すぐではなく」ではなく「今」行われる動作に対して「～ておく」が用いられている。(5)' (6)' は「～ておく」を省略したものである。

- (5)' 君の免許証取り戻しにさ。おじさん、頼むよ。＜ヘイ＞あ、お勘定するわ。
- (6)' ・・ええ、あのお気持ちだけちょうだいします。はい。

(4) (5) と比べると「～ておく」があった方が「ちゃんと」の意味が加わり丁寧さが増す感じがする。話し手が自分のなすべき事柄に対して「～ておく」を加えると、そこに「ちゃんと」「あらかじめ」「前もって」という相手に対して確実にやっておくという意図が加わり、それは相手に誠意を示すことであり丁寧さへと結び付いていくと考えられる。

- (7) 係長：歌いましょう、一緒に。(そう)、やっぱりやめときましようね。
- (8) 和夫：・・今度ぼく勝てそう。いやあ、こりゃいいぞ。
やめときましょ。えー、これで負けたら、ねえ、この記念すべき日の印象、だいなしにし

てしまう（もん）な。

(7) (8)は「やめておく」が使われているが、「将来に対する意図」のために「やめておく」ということで説明がつく。ここでは「やっぱり」と「～ておく」の結び付きに注意しておきたい。

2) 話し手の意志を表す「～ておこうと思う」

(9) ホワイト：ええ。ま、この本が役に立つかどうかわからないんですけど、質問された時のために、発表する前に一応目を通しておこうと思ひまして。

3) 助言、依頼・要求表現に現れる「～ておく」

A 助言を表す「～ておいたほうがいい」

相手に対する助言として「～ておいたほうがいい」が用いられやすいようである。

(10) 次子：・・・ね、恋人かしら。まさか同棲なんて。その女のこの住まい、さりげなく聞いた方がいいですよ、ね。

(11) スミス：そうですか。じゃ、もう一度、電話をしておいた方がいいかもしれませんね。忘れているかもしれませんから。

(12) 鈴木：ええ。また誰かが借りないうちに、持ってっといたほうがいいですよ。

(13) 佐江：・・・ね、あんたね、荷物が落ち着くまでさ、これ、ゆわえといたらいいわよ。

(11)では「忘れているかもしれないから」という理由があり、忘れられては困るから「電話をしておく」。(12)では「誰かが借りていく」心配があるのでその前に「持って行っておく」のであり、(13)では荷物が落ち着かないから「ゆわえておく」のである。(10)～(13)に共通していることは何らかの理由のために前もってやっておくということである。「～(だ)から」「～前に」「～まで/までに」等と「～ておく」が呼応するようである。

B 要求・依頼表現を表す「～ておいて/～ておいてください/～ておきなさい」

(14) 鈴木：じゃ、このノートに書いといて。

(15) 日出夫：千歳空港。さっき悪かったよ。おやじにもそう言っといて。

(16) 看護婦：お宅から車で何分で来られますか。電話番号を書いといてください。・・・

(17) 良雄：あのさ、15年のローンで、うち買うと、かみさんがこんな声出すんだから、おぼえときなさいよ。

カジュアルな会話では「～といて。」の形で依頼表現が表されることが多い。要求・依頼表現で「～ておく」が付くと「ちゃんとしておいて」とか「あとでしておいて」の意味になる。

4) 非難を表す「～ておいて・・・」

「しておいて」「しておきながら」の形で「したにもかかわらず」の意味を表す。⁸⁾ 多くの場合、話し手の聞き手に対する非難になることが多い。

(18) 典子：ふだんりっぱなこと言っといて・・・。

(19) 典子：・・・日ごろはげましといて、都合が変わると、人がへんに思うから引き上げ（ろ）なんていうのもへんだわ。

(20) 陽子：でもあとから家建てといて、言うことがずうずうしいよね。

5) 言い訳・弁解的な気持ちを表す「～ておいたんだが」

「～てみる」が過去の形をとって、その後に逆接を表す語を伴って、本題に入る前の、前置きのな役割を果たす場合があったように、「～ておく」にもそれに似た用法がある。「～ておいたんだが」は必ずしも前置きとして使用されるとは限らず、本題の後ろにうまくいかなかったことに対する言い訳・弁解として付け加えられることがある。いずれの場合も話し手の残念な気持ちを表している。

(21) スミス：それが、昨日までにって頼んでおいたんですけど。

(21) は残念な気持ちが他者に向けられて非難っぽくなっているが、(22) は逆に自分自身に向けられてお詫びの形をとっている。

(22) 典子：ええ、もっと早く申し上げておかなければいけなかったんですが。

以上、「～ておく」を述語の形でまとめてみたが、「～ておく」の表現意図としては次のようにまとめられよう。

1. 主に話し手の肯定的な心的態度を表す。
2. 「あらかじめ」「前もって」するという意図が強い。
3. 「今すぐやらなくてもあとでやる」という気持ちを表すことが多い。
4. 「ちゃんと」と呼応する。
5. 「～前に」「～まで／までに」と呼応する。
6. 理由表現とともに現れることが多い。
7. 「ちゃんと」やるということを示すため丁寧表現になりやすい。
8. 将来に対する意図・関心を表す。

4. 3 「～てくる」

では次に「～くる」の表現意図を観察してみよう。水谷氏は話し手の立場から「～てくる」を次の3つに分類している。

1) 話し手の立場から見る「出現・変化」

(1) 新しい言葉が生まれてくる。

(2) 雨が降ってきた。

これは出現・変化などの動きを話者の立場から見ているもので、(1)では生まれた新しい言葉は話者の視界にあり、(2)では雨の降り始めによって何らかの影響を受ける立場からの発言である。「雨が降り始めた」が事実の客観的な叙述であるのと異なっている。

2) 話し手にむかって行われる行為

(3) 母がわたしにセーターを送ってきた。

(4) 田中さんが電話してきた。

(3)(4)は「母がわたしにセーターを送った」「田中さんが電話した」のように「だれが何をしたのか」という単に事実を述べる表現ではなく、話者の立場を示した表現である。

3) 聞き手との共存意識を示す「～てくる」

(5) きのう京都へ行ってきた。

(6) 先月、立山に登ってきましたよ。

外国人は(5)(6)と言うべきところを、「きのう京都へいきました」「先月、立山に登りました」と言ってしまうが、「～てくる」を加えることによって話し手が自分の経験を聞き手と分かち合おうとする態度を示している。

水谷氏の考え方に沿って次に2, 3の例を見てみよう。

1) 話し手の立場から見る「出現・変化」

(1) 英子：小泉さん、成績もひどく落ちてきたでしょう。大学受験ももうすぐよ。浪人しなくなかったら。

(2) 大助：・・あれ、降ってきたよ。タイミングがいいなあ、クリスマスに雪なんて。

(3) 職人：風呂つてのはね、だんだん下からこう湧いてくる。あれがなんとも言えなくいいんだ。・・・

2) 話し手にむかって行われる行為

(4) 花子：ゆうべ、電話してきたの。

3) 聞き手との共存意識を示す「～てくる」

(5) 大助：今日、今井先生とこでごちそうになってきたの。

(6) 英子：・・もしもし、あの、こちらにあの新しく越してまいりました東興印刷のあの赤・・もしもし。

(7) 君島：・・ところが、女に逃げられた野郎、急に酔いが回ったのか、今度は僕に絡んできたんですよ。

(5) - (7)とも話し手が聞き手に新しい事柄を持ち出すことで会話に話題を提供している。(5)は「ごちそうになった」だけでも十分だが、「ごちそうになってきた」と言うことで聞き手の興味を引く働きがある。(6)は電話での会話だが「まいりました」を加えることで相手を重んじた表現になっている。(7)はそれ自体は楽しい話題ではないかも知れないが、「絡んできた」とすることで話題が生き生きと盛り上がっている。水谷氏の言う「共存意識」を示す「~てくる」は聞き手に話題の共通の場を提供しようという「聞き手尊重」の表現であると言えよう。聞き手尊重であればそれは時に丁寧表現に結び付く。(6)がその顕著な例であろう。次の(8)はその逆の場合である。

(8) 君島：また、名刺出してきやがったん(で)すよ。こっちは破ってふんづけてやりましたけどね。

次に「~てくる」の他のいくつかの表現の例を示す。

4) 聞き手に知らせを表す「~てきました」

(9) 先生、お茶を持ってきました。

6) 怒りを表す「~てくるなんて/~てくるんだから」

(10) 金巻：だからね。きのう電話したんだよ。今ごろむし返してくるなんて。なに、きのう休んだ。しかしね・・・

(11) 山崎：いち(ん)ちで下げてくるんだから。

5) あきれを表す「~てきたり~てきたり」

(12) 勝谷：急に話を持ちこんできたり、断わってきたり・・・。

(13) 重助：だいたいおまえ甘いよ。急に帰ってくるわ、インドへ行きたいと言うわ、金は出せ、何考えてんだい。

6) 報告を表す「~てくるって」

(14) 母：えーとね。12月に帰って来るって。

(15) しま：弘がね、ガールフレンド連れてくるんだって。フフ、じゃ、あたしも行こう、美容院に・・・

(16) 大助：母さん、<うん>あの、あの広次いつ帰って来るって。

7) 要求・依頼を表す「~てきて(ください)/~てきなさい/~てこい」

(17) 次子：・・・あ、とうきび、もいできてください。

(18) 英子：ほらほら、あなたたち、はやく自分の部屋（を）かたづけてらっしゃいよ。

(19) 典子：あのね、会社のことなんだけど、んん、もう電話じゃいえないから、今夜さ、なるべく早く帰ってきて。お願い。ね。

(20) 小倉：あ、言い気持ちだよ。風呂入ってきなさい。

(21) 小倉：・・風呂入って来い。ひのきの香りをかいで来なさい。

以上、「～てくる」の表現意図は次のようにまとめられよう。

1) 話し手の立場から見る「出現・変化」を表す。

2) 話し手にむかって行われる行為を表す。

話し手に直接的にむかって行われなくても話し手がそう解釈することで怒り・あきれになる場合もある。

3) 聞き手との共存意識を示す

聞き手尊重の表現となって丁寧さを表すことがある。

5. おわりに

本稿では補助動詞の表現意図を、述語に注目し、述語の形からとらえようとした。補助動詞自体の持つ本来の文法的意味が、表現意図をどこまで支配しているかの線引きはなかなか難しい問題である。ただ、観察を通して明らかになったことは、「～てみる」「～ておく」「～てくる」はその文法的な意味だけにとどまらず、実際の会話では話し手の心的態度と密接に絡まり、聞き手への配慮的要素が非常に強いことである。本稿では話し手の意志表現を中心に考えたため、その特徴がより顕著に観察されたようである。

表現意図のとらえ方は述語の形のような構造との関わりを見る立場だけでなく、広く談話機能、談話構造の中でとらえようとする立場、話し手の心理的要因を探ろうとする立場、さらに社会的、文化的な広がりの中でとらえる立場もある。後者になればなるほど知識的なものが入り、観察の要素が複雑になる。本稿は補助動詞の一部の、表現意図という大きな課題のほんの一部の考察の試みである。

今後の課題として、表現意図をどう日本語教育に位置づけ、どう取り入れていけばいいかを考えていきたいと思う。

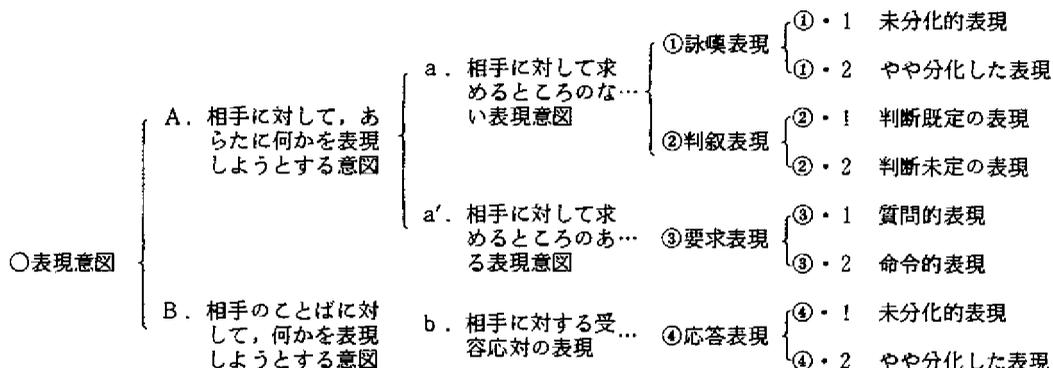
(注)

1) 水谷信子(1985)(1989)

2) 高橋太郎(1969)が『日本語動詞のアスペクト』(1976)に収められている。

3) 宮地裕(1960)

4) 宮地(1960)は表現意図を次のように分類している。



宮地氏は分類に当たって「・・結果的に見て、判叙表現と要求表現とが、もっとも形式上の分化もこまかいということは注目しておくべきであろう。」と述べている。

5) 【An Introduction to Advanced Spoken Japanese】 (アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター)

6) 草薙(1971)は negation morpheme またはthe aspect morpheme が入り込むことによって「～てみる」の意味が変化するかどうかをテストしている。次はその中の一節である。

(1) aruite miru

a) aruite miru 'I try to walk.'

It is also possible to say:

aruite minai 'I do not try to walk.'

but we cannot say:

*arukanaide mita

Meanwhile, in:

b) aruite miru 'I looked, while walking.'

It is possible to say:

arukanaide miru 'I looked at somethin g without walkin.'

and:

aruite minai 'I walked and did not look at anything.'

(1) において a) の miru は補助動詞であり、b) の miru は動詞である。草薙氏は a) において aruite minai を適格としているが、筆者には不自然に感じられる。「歩いてはみなかったけど」のような完了表現、「歩いてみない?」のような否定の勧誘表現では可能であるが、話し手の意志表現としては「歩いてみない」は一般的でないように思われる。

7) 草薙(1971)は、区別するのは非常に難しいとしながら、補助動詞としての「～てみる」を、1. Trial (This denotes that an action is tried.) と、2. Observation (This denotes that someone

does something to see what will happen.) に分けている。

そして a single word では同じ補助動詞が繰り返して現れることはないのに、「～てみる」は他の補助動詞と異なり複数回（3回以上は不可）現れうると述べ、次のように説明している。

(hañasite mite miyóo) 'I will try to talk and see.'

(káite mite iru) 'One is trying to write.'

(káite ite miru) 'One is writing and will see.'

From the above empirical data, two different morphemes, 'trial' and 'observation', are established. Consequently, we may have the identical manifestation for two meanings. For instance:

(káite miru) 'One will try to write.'

(káite miru) 'One will write and see.'

草薙氏によると、「～てみる」が2回現れたとき、初めのものがTrialであり、あとのものがObservationとなる。また1回だけのときも意味の分化がある。

今回の収集データの中には「～てみる」が複数回現れた例はなかった。また Trial か Observation か区別が非常に微妙でもあり、今回の観察では両者を区別するまでには至らなかった。

8) この用法については高橋(1969)にも取り上げられている。

(文献)

- 水谷信子 1985 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
1989 「補助動詞「～ていく、～てくる」などの指導」
『言語理論と日本語教育の相互活性化』 日本語シンポジウム予稿集
- 宮地 裕 1960 『話しことばの文型(1)』 国立国語研究所
- 高橋太郎 1976 「すがたともくろみ」 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 草薙 裕 1971 「THE HYPOTHETICO-DEDUCTIVE APPROACH IN GRAMMAR: a consideration of basic methodological principles and some formalism applicable to clause structures with a detailed practical illustration」
- 吉川武時 1976 「現代日本語動詞のアスペクト研究史」 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 寺村秀夫 1984 『シンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 丸山敬介 1989 「機能シラバスに関する調査」 『日本語教育機関におけるコースデザインの方法及びコース運営上の教師集団の役割の分担に関する調査研究』 日本語教育学会
- G.N.リーチ 1987 『語用論』 紀伊國屋書店
- 毛利可信 1980 『英語の語用論』 大修館書店

(出典)

『女が職場を去る日』国際交流基金ビデオ教材

『ちょっといい夫婦』 ♪

『母上様』 ♪

『3年たって、恋』 ♪

『梢のむこうに秋』東芝日曜劇場ドラマ

『現代中級日本語』名古屋大学

『An Introduction to Advanced Spoken Japanese』アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

『New Situational Functional Japanese 試行版』筑波大学留学生教育センター